

防災歳時記 (45)

—深夜の土石流、集落を襲う—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮澤 清治

老母を背負って避難する

1975(昭和50)年8月6日午前0時すぎ、青森県に雷を伴った集中豪雨が降り、中津軽郡岩木町百沢地区(現、弘前市)を大きな土石流が襲った。死者22人、重軽傷者31人などを出し、午前1時からの1時間雨量は百沢で70ミリ(推定)、黒石で65ミリであった。

百沢地区は市街地から西に約10km離れた岩木山(1,625m)のふもと、岩木山神社近くの静かな集落である。溪谷から押し出してきた土石流は、幅100m余にわたって集落のみ込んだ。ひと抱え以上もある巨石が、民家を約500mも押し流し、つぶしてしまった。

「午前3時ごろだった。ゴワーと大きな音がした。岩木山が爆発したのかと思った。外へ出たら水がひざまできていた。80歳になる母親を背負って外に飛び出し、急いで高台に避難した。

消防団員は一軒一軒の戸をドンドンたたいて、一人一人を起こした。起きてくれなかった家もあった。そのうちに高さ5mもある水の壁が押し寄せた。こんなことは生まれてはじめてだ」と、辛うじて助かった

Sさんが語った。

夜が明けた。鉄砲水が農家や商店が連なる百沢地区の中央を流れていた川を突っ切った。直径10mもある大きな石がごろごろと転がり、ここに家があったかと思われるほどの荒れよう。倒壊が免れた家の軒先には押し流されてきた2、3台の車がたたきつけられていた(写真1)。

百沢小学校の講堂の床は、30cmもの土砂がたまり、音楽室のオルガンや太鼓などの楽器類も土砂でうずまってしまった。

自衛隊員や消防団員が黙々と土砂を取り除き、死者のためにせめてもの安置場所を造った。遺族たちは突然の悲劇にぼう然とし、押し殺すようなおえつをもらしていた。



写真1 百沢地区の土石流のあと
(1992年9月筆者写す)

示現堂を訪ねて

災害から2年後の昭和52年8月6日の命日に、巨石が累々と残る百沢地区に、犠牲者を供養する示現堂が建てられた。示現とは、仏や菩薩が姿を変えて現れ、衆生を救済するとの仏教用語。堂の中には、犠牲者の写真のほか、土石流の状況と解説パネルが展示してある(写真2)。



写真2 示現堂

百沢(蔵助沢)土石流について

発生日時 昭和50年8月6日午前3時前後
発生原因 昭和50年8月5日から7日にかけての東北地方の大雨による推定降雨量(連続雨量110ミリ、最大時雨量70ミリ)
発生源 岩木山頂付近(標高1,460m)の鳥海山頂直下に崩壊土量460立方メートルの小崩壊が発生、溪床・溪岸を浸食し土石流となった。
被害状況 死者22名、重傷23名、住家全壊・流失22棟22世帯86名、半壊23棟23世帯103名移動土砂量約50,000立方メートル

土石流(debrisflow)の一般的解説

定義土石流は水量に対して土砂量が著しく大きく、かゆ状のものが、重力の作用で急

傾斜の河床上を自ら運動する現象をいう。

特徴 土石流の先端部(フロント)は盛り上がって流下し、岩塊を先頭に進む

流速 2~20メートル毎秒

大雨警報と洪水警報は連動して発表される

今回の災害では、大雨警報が6日午前0時ごろに、また洪水警報が少し遅れて午前3時ごろに発表されたと記憶している。洪水警報が遅れたという非難があった。

大河川では、上流に大雨が降ると、ある程度の時間が経過してから下流が洪水になることが多い。したがって、まず大雨警報を出し、しばらくしてから洪水警報が出される。ところが、中小河川では流出が早く、大雨即洪水となることがしばしばある。岩木山災害はその典型であった。

気象庁ではこの災害を教訓として、昭和53年3月から大雨注意報・警報と洪水注意報・警報(気象庁が単独で出すものは、原則として連動して発表するように業務を見直した。

暑い夏の盛りの8月上旬に、北日本や日本海側で寒冷前線の南下に伴う豪雨がよく降る。2年後の昭和52年8月5日未明に再び青森県津軽地方を襲った「ねぶた豪雨」(死者11人)、古くは昭和36年8月3日未明の新潟県出雲崎豪雨(死者・行方不明者25人)などもそうだ。

災害は意表をついてやってくる。今回の犠牲を無にしないように、高齢者らの避難体制づくりには一層の配慮が望まれる。